

## 第5章 実践者による実践研究の意味

山西優二

山西・小山班による協働実践研究を終えるに当たって、この2年間を振り返りながら、協働実践研究の意味について改めて確認しつつ、また実践者による協働実践研究の意味についても、若干の考察を加えておくことにしたい。

### 1. 協働実践研究の意味

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが2006年9月以降「協働実践研究プログラム」を進める理由の1つとして、「研究と実践を切り離すことなく、研究者と実践者が協働して研究活動を進めていくため」<sup>1</sup>であることが指摘されている。またもう少し詳細に見るならば、センター長であった高橋正明は、センターの機関紙『多言語多文化—実践と研究 vol.1』の「発刊にあたって」のなかで、協働実践研究について次のように指摘している。

「センター発足当初から、私たちは『非収奪型の研究』を研究活動の目標に掲げました。それはこれまでしばしば見られた研究方法に対する批判を私たちが抱いていたからです。研究者が『現場』に出かけ、実践者へのインタビューや資料収集を通じてデータを集積し、その研究成果を『研究業績』として発表する。しかしその成果が現場に還元されることはほとんどないし、研究成果の有効性が『現場』で検証されることもない。本来ならば『現場』に生起している諸問題の解決に資するべき研究が、結局のところ研究者個人のステイタス上昇のための手段に墮してしまっている。このような状況を克服するために私たちが掲げたのが『協働実践研究』の旗でした。研究者と実践者が同じ地平に立ち、それぞれの専門性と知識を最大限に活かしながら協働して問題の分析とその解決の道を探っていくこととしたのです」<sup>2</sup>

研究と実践を切り離さないこと、収奪型研究を克服することへの思いが示された文章である。このように実践と研究の関係を切り離すことなく捉え、また実践研究が非収奪型研究であるとするならば、実践研究とは、「実践に主軸をおいた研究」「実践のための研究」を意味し、研究の実践への寄与が想定されている研

究と捉えることができる。一方、収奪型研究とは、「研究のための研究」であり、実践を扱いながらも実践を手段化し、研究を目的化し、実践への寄与が想定されていない研究ということができよう。

ただ、実践と研究との関係において、ここで注意すべきことは、学校教員・市民団体職員・国際交流協会職員などの実践者が行う活動が実践であり、大学教員などの研究者が行う活動が研究であるといった固定的、分断的、役割分担的な認識に立たないということである。実践者は実践を行うが、また研究も行う。研究者は研究を行うが、また実践も行う。実践と研究が、決して分断されたものではなく、またどちらかが常に優位にあるものでもないのと同様、実践者と研究者も分断的に捉えるのでなく、またどちらかが常に優位にあるものでもない。

以上のように実践研究を捉えると、実践研究の方法として、実践上の問題や課題を軸に、多様な方法が想定できる。実践に学びつつ帰納的にそこに何らかの原理や法則を見いだそうとする研究もあれば、逆に演繹的にある原理や法則から、多様な実践への方策などを導き出そうとする研究もある。また両者を相互に組み合わせながら、実践と研究を交錯させることも可能である。また実践研究は、実践者による研究であることは必然ではなく、実践者と研究者がまさに協働することにより、それぞれの特性を活かしながらの協働実践研究をつくり出すことも可能である。

## 2. 実践者による協働実践研究の意味

今回の山西・小山班の協働実践研究の1つの特徴は、研究員の一人ひとりが、国際交流協会、ボランティア協会、市民団体などの組織で、コーディネーターとしての実践を積み重ねてきた経験を有していたことであった。まさに「実践者による協働実践研究」が成立していたのである。この山西・小山班による「実践者による協働実践研究」の2年間の流れを時系列的に整理してみると、以下のようになる。

- ①現場の多様な実践者（コーディネーター）の声に耳を傾け、コーディネーターを取り巻く問題状況を明らかにすること
- ②コーディネーターの専門性やその形成に関連した先行研究を整理すること
- ③研究員自らが、自らの実践経験および専門性の形成史を省察すること
- ④上記の過程を経て、多文化社会コーディネーターの専門性とその構造を仮説的に描き出すこと
- ⑤描き出された多文化社会コーディネーターの専門性とその構造への第三者か

らの意見をくみあげること

- ⑥専門性の構造を意識しつつ、専門性形成の視点および可能な範囲で専門性形成プログラムを提示すること

山西・小山班の研究は、以上のような6つの過程を経たことになるが、特に③と⑥の過程をとりえたことは、山西・小山班の研究が、「実践者による協働実践研究」であったためである。研究員自らが実践者でもある場合、その研究は必然的に実践的となり、実践研究を生み出しやすい。自らの実践に関する経験知・暗黙知を省察を通して可視化し、そこに何らかの原理や法則(今回の場合はコーディネーターの専門性)を協働の中、見いだそうとする試みは、まさに「実践者による協働実践研究」の醍醐味とも言えるものであった。またその何らかの原理や法則を理念上にとどめるのではなく、日々の実践に活用できることもまた「実践者による協働実践研究」の醍醐味であった。

ただ一方、実践者による実践研究は、時として自らの実践への思い入れから、客観性、批判性を見失い、主観に走りがちであることは否定できない。したがって実践者による実践研究には、協働性、つまり相互に批判的に協働し合える関係が重要になる。山西・小山班の研究にこの批判的協働性が十分に機能していたかどうかは、改めて実践的にも研究的にも検証することが求められるようが、「協働」実践研究の意味と重要性が改めて今回の実践研究の中から浮かびあがってきていることは確かである。

今回の山西・小山班の協働実践研究では、「多文化社会コーディネーターの専門性と形成の視点」をテーマとしたが、実践そして実践研究にとって、またコーディネーターの専門性形成にとっても、実践者による協働実践研究の意味が少しずつあきらかになってきているように感じている。改めてこの2年間、山西・小山班の「実践者による協働実践研究」にご協力いただいた多くの方々に感謝しつつ、今後、多くの場で、課題に即した多様な協働実践研究が生み出されていくことを期待したいと思う。

---

[注]

<sup>1</sup> 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター, 2008, 『シリーズ多言語・多文化協働実践研究 1～6』の裏表紙に示された「協働実践研究プログラムとは」からの抜粋

<sup>2</sup> 高橋正明, 2008, 『発刊にあたって』『多言語多文化—実践と研究 vol.1』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター, pp.3-4.